
爆弾ゲーム

柳条湖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆弾ゲーム

【Nコード】

N9037M

【作者名】

柳条湖

【あらすじ】

日常を過ごしていたある少年は、ある日不意に正体不明の男に拉致され、そこで謎のゲームに参加させられる。

その名も“爆弾ゲーム”。

勝てば生き残り、負ければ死ぬ。

それだけの単純なルール。

最後まで生き残っているのは誰なのか・・・

Prologue

何が始まるの？

危険な遊戯

なぜ？

不明

何が聞こえる？

死の足音

何を感じる？

恐怖

それは何？

命を掛けた遊び

名前は？

爆弾ゲーム

なぜ？

らない？

なぜ？

分からない？

分か

い
？

なぜ？

分からな

終える条件は？

うんうん。

誰かが死ぬこと

どうしてだろうね

戸田幸市は並木道をただ歩いていった。

今は枯れている桜の木の並ぶその道は寂寞として静かだった。

「なんか・・・今、俺寝てたか？」

眩きに覇気はない。

眠たげに胡乱な眼を擦りながら幸市はただ歩く。

「なんか、変な夢見た気がするけど・・・」

そう呟きながら、もう一歩前へ。

「まあ、いいか・・・」

今日もまた学校へ向かう。
それだけの、ただの日常。

The First Day - Friend -

晴天。

雲一つなく晴れ渡る天空には夏日の太陽が燦然と輝いている。

「あゝしんどっ！しんどい！もう、しんどい・・・」

ぶつくさとボヤキながら幸市はまた一歩歩みを進める。

満開時には咲き誇るといつても過言でないほどの誇らしさを見せる桜並木の道も、今はただ寂寞として空虚な風景があるだけだった。そんな寂しさ漂う道を幸市は悠然と歩いていた。

額に伝う汗を夏服の袖で拭いながら、自らが通う高等学校への道に行く。

その足取りは決して楽しんでいる者のそれではない。

「・・・ん・・・来たか。」

その道すがら、幸市はもはや恒例となった背後からの足音を聞く。幸市と違って楽しげに弾むその足音は段々と大きくなり、そして、

「ハッロ！幸市イ！ハウアーユー？」

ふざけた調子でそんなことを宣いながらそいつは思いっきり幸市の背中を押した。

覚悟していた幸市は少ししんのめるだけで何とか堪える。

「あゝもう、うるせえよ！ちょっと黙つてろ。」

馴れ馴れしく肩を組んでくるそいつを手で突き飛ばしながら、幸市は素っ気なく言い放つ。

そいつがそんなことで堪える筈もないと知りながら。

「これがいわゆるツンドラというやつですな。」

「絶対ちが・・って、ツンデレですらねえのかよ！」

「ニヤハハハハハ！ 今日もツツコミ冴えてるニヤ！」

「そういうお前はいつまで笑えないボケを続ける気だ？」

朝の定例とも云えるやり取り。変わらぬ日常。

幸市の無二の親友である伊坂正史はいつも通り、楽しげに笑っていた。

「まあまあそう言いなさんなよ、幸市の旦那。俺に会えなくて淋しかったんだろ？」

「寂しかったねえ。丁度いいや。このイライラをぶつけるサンドバックになれ。」

「オツケー分かった！ 学校まで競争だな？ 位置について！ よーいドンッ！！」

「あ！ 待てコラッ！！」

そうして、いつも通りの二人の楽しい朝は始まる。

その二人の様子を遠くから眺めている二人の男がいた。否、『二人を』ではなく、『戸田幸市を』見ていたのだ。

「彼だな。」

「はい。」

それだけの短いやり取りが交わされた。

「はよ〜っす。」

「おはようさあんっとな。」

幸市と正史は二人並んで教室に入る。

既に教室内にいたクラスメイトからは「うい〜っす」と気のない返事が返って来た。

それだけで彼らはすぐに自分たちの話題に戻る。

朝のこの時間帯はただでさえざわざわとした騒がしい喧騒に包まれているものだが、今日に限ってはいつも以上に騒がしい喧騒の中にあつた。

それも当然。

今巷を騒がせる神隠し事件。

その真相について憶測やら推測やら、果ては秘密結社の陰謀説から空想上の生物の存在までありとあらゆる話題が飛び交っているのだから。

「ねえねえ、何の話？」

「分かっているでしょ？正史君。」

「（やれやれ・・・）」

教室内には男子のグループやら女子のグループやら大小様々なグループに分かれている。

正史は躊躇いもせずに女子のグループの中に飛び込んでその話題を訊く。

思わず溜め息の漏れた幸市だった。

「また一人、消えたんだって。」

他に話題は無いのかと言いたくなるくらい教室内の会話は“それ”一色に染まっていた。

何のことも無い、ここ数か月前から巷で噂の神隠し事件のことだ。聞くところによると、不定期ながら平均して一週間に一人のペースで人がいなくなっているらしい。警察やらも全力で失踪者の捜索に当たっているらしいが芳しい成果は上げられていないとのこと。

「怖いよね」

「うんうん、ちょく怖い。」

正史が話しかけた女子はそれで伝えることは全て済んだとばかりにグループ内の話に戻る。

とは言っても、その内容は御粗末なもので、それぞれの憶測を話し合いながら究極の所『怖い』というただ一点にのみ帰結するだけの中身の無い会話だ。

「情報仕入れてきたぜ」

その後もいくつかのグループ（全て女子）に声を掛けてきた正史

が幸市の所へ戻ってくる。

その表情は何か大きな仕事を成し遂げたかのような達成感に満ち溢れていた。

「また神隠しが起こったんだってさ。」

「それで？」

「やっぱり貧乏人らしいってさ。」

「つまり、何の情報も増えてないってことだな。」

失踪した人間にはある共通点があるらしい。

それは、正史も言っている“貧乏である”こと。

失業者、ニート、生活保護授受者から果ては多重債務者まで、兎に角失踪者は幅広い範囲の“貧乏人”である、と噂されている。

そう、あくまで噂されているだけである。

「いやあ、今回は新しい情報も増えてるみたいだぜ。」

「へえ、聞かせろよ。」

「昨日失踪したのは、何でも住所公園のホームレスだったらしいんだけどさ、」

「ふむふむ。」

「そのホームレスが住んでた段ボールハウスの中に何千万つて金があったらしいんだよ。」

「んな馬鹿な。」

そんなのはまさしく根も葉もない噂であると幸市は切って捨てる。実際、そんな金を持っているならホームレスになんてならないという考えが幸市の中にあるというのも一因ではあるが。

「で？」

「いやあ、自他共に認める貧乏人の幸市君がどんな反応をす

るかな〜って思ってたさ。」

正史が言うように幸市の家は貧乏である。

どれほどかといえば、幸市の母曰く「シャンプーなんて贅沢品」のこと。

石鹸を水で薄めた物を使っているほどだ。

幸市の父は、事業に失敗し、うっかり保証人になってしまった友人が逃げ出し、そのせいで茫然自失状態に陥ってしまい、最終的には事故を起こして人を一人殺してしまった、という不幸が重なった結果、莫大な借金を作った上で自殺した。

崖からの投身自殺の状態で遺体は見つかっていないが、遺書と崖の鉄柵の一部に壊れた個所があったことから死亡したものとされた。

その際の保険金によって借金は幾許か軽減されたが、それでも生活が楽になるわけではない。

母のパートでの日稼ぎでなんとかその日暮らしをしているレベルである。

幸市も中学を出たら働くつもりでいたが、母の「高等学校だけは卒業してほしい」という願いを受けて進学した。

無論、そんな幸市に対する世間の風当たりは最初だけは強いものがあつたが、しかし、そんな物は今幸市には当たっていない。

「言ってくれるぜ。貧乏人舐めると食い千切るぞ。」

「それすらも食糧とは、流石だぜ。俺にできない事をやる！そこに痺れる憧れるう。」

世間の風潮が幸市を責めるというよりは、あまりにも不幸っぷりに同情の方向へ流れたからだ。

それには今ここでふざけている伊坂正史の存在が大きく関与している。

彼はその明朗快活かつ天真爛漫な性格であつという間に幸市を自分の仲間として仕立て上げ、気付けば幸市は正史の親友にして不幸ながらもそれをバネにして頑張っている健気な好青年という立場を手に入れていた。

「よし、食い千切つてやろう。」

「やめんさい！俺つてほら美味しくないぜ。」

「俺つて好き嫌い無いんだよね。色んな意味で。」

「ってか、ここでそれは『両刀^{バイ}使い』という意味に取られても仕方が無いというかそうとしか取れないと言つか・・・」

正史は冷汗をダラダラとかきながら後退する。

無論、幸市はノーマルな性的趣向の持ち主であるし、カニバリズム食人行為に傾向するほど偏食でもない。

云うまでも無く、これは幸市と正史の日常的なやり取り、冗談の言い合いである。

「お！ほら先生きたぜ。」

「やれやれ。仕方ないな。」

教室の扉がガラガラと開き、そこに頭に禿が掛つた壮年の男性の姿を認めた幸市は諦めたように正史から離れる。
その表情は楽しげなそれだった。

「遅いぞお前ら!!」

「はい、すいません!」

いつも通り、司馬の檄が飛ぶ。

幸市と正史は声を揃えて謝った。

幸市も正史も部活動の代名詞ともいえる野球部に所属している。

中でも幸市は高校生でも屈指の名遊撃手^{ショート}として顧問の司馬からの信頼も厚い。

それだけに司馬からの監視の目も厳しく、いつも一緒にいる正史までとばっちりの如く厳しい指導に晒されているのではあるが。

「グラウンド十周タイヤ引き!その後、兎飛で五週だ!」

「は・・・はい・・・」

「声が小さい!!」

「はい!!」

司馬の基本理念は『精神一到何事かならざらん』である。

「クッソ〜司馬のヤローめえ。体中が痛いじゃないかあ。これ以上イケメンになったらどう責任とってくれるんだよう。」

部活も終了した帰途、幸市は正史と共に並木道を朝とは逆方向に向かって歩いていた。

「今回は完全にお前が悪いだろ？購買で売れ残ったパンなんか馬鹿食いつてさ。」

「うう・・・それを言われるとにとんともかんとも・・・」

特にこれといった生産性の無いやり取り。

その大半は司馬に対する愚痴であるが。

延々とそんな調子で会話を続け、やがて幸市と正史が別れる岐路に辿り着いた。

「やれやれ。まあいいさ。じゃあまた明日な。」

「おう。んじゃあな。」

軽く挨拶をして幸市は正史と別れる。

そこに名残惜しさとか感慨深さとか呼ばれるものは存在しない。単に今日は別れ、また明日会つという約束だ。

「あれ？」

そのまま一人で帰途につき、やがて幸市の帰る家が見えてきたところになって幸市は違和感に気づく。

「何だ？あれ・・・」

幸市の家の前に何やら黒塗りの高級っぽい車が止まっている。

もう少し近づいてみて、それが名前を出せば誰もが知っている外国製の超高級車であることがわかった。

「うん？借金の取り立てが来るのはもう少し先のはず・・・」

経験則から来る悲しい知識だった。

「戸田幸市だな？」

「え？」

暫く呆然とその車を眺めていたら不意に背後から声をかけられた。
無感情で機械的な冷たい声だ。

「戸田幸市だな？」

振り向けば、ダークスーツをピッタリと着こなした強面の男が幸市を見下ろしていた。

高くはないが決して低くもない身長をしている幸市を見下ろしているところから、その男の身長は少なく見積もっても185cmはあるだろう。

「ええ、そうですが・・・」

幸市は思わず素で返答してしまう。

「よし。」

「あつ！ガッ・・・」

いきなり後頭部に衝撃を感じ、幸市は一切抵抗することもできずに昏倒した。

「連れて行け。」

男のそんな言葉が聞こえた気がして、自分の体が車に乗せられたのを感じたところで幸市の意識は完全に途切れた。

The First Day - Begin -

「へえ、彼が今回の新参者・・・チャレンジャーってわけかい？」

「クスクス・・・可哀想ね。まだ未成年じゃないの。」

冷たい床の感触と遠くから聞こえてくるようなそんなやり取りで幸市は目を覚ました。

「・・・なん痛っ！首が・・・痛て・・・」

頸部に痛みを感じ、幸市は首を摩りながら体を起こす。

が、周りの風景を見渡して幸市は首の痛みなど完全に忘れてしまう。

そこは真っ白な空間だった。

壁も床も天井もその全てが白色で距離感が掴みづらいが、およそ20メートル四方程度の広い立方体状の部屋であるだろうと推測できる。

しかし、単純に広いだけの空間ではない。

まず、床には大凡5メートル程の間隔で直径一メートルほどの円が正方形状に四つ描かれている。

また、壁の一角には100インチほどのテレビ画面のようなものが埋め込まれていた。

当然、幸市には何が何やらわからない。

「やっと起きたかい？」

「クスクス・・・」

「・・・・・・・・・・」

そう声をかけられ、幸市はやつと自分以外にも三人の人間が部屋の中にいたことを悟った。

それぞれ、ラフな格好をしたスタイルの良い女傑といった風体の女性、何もかも見透かしているとも言うような妖艶な雰囲気を持つ女性、そして幸市にとっては父を連想させる気弱そうなサラリーマン風の男性の三人だ。

「え・・・と・・・？」

幸市は首を傾げる。

まだ状況が飲み込めないのだ。

「まあ分からない事ばかりだろうけどさ。とりあえず自己紹介とこうか。私あ平井奈美だ。ちなみに七回目。よろしくな。」

そう言つて女傑といった風袋の女性、奈美はニカツと笑ってみせる。

「クス・・・外島真帆よ。私は四回目。よろしくね？」

今度は妖艶な雰囲気を持つ女性、真帆がそう言いながら微笑んだ。

「さ、佐藤晋輔・・・に、二回目・・・です。」

サラリーマン風の男性、晋輔は今にも逃げ出しそうな声音でそう名乗った。

「えつと・・・戸田幸市です。あの・・・七回目とか四回目って何の事です?」

三者三様の自己紹介に幸市は思わず釣られて名乗り返し、同時に自己紹介の中にある理解不能の回数について尋ねた。

「なあに、気にすることは無い。直ぐに分かる。」

丁度奈美がそう口にした時、ブオンという不気味な音と共に壁に埋め込まれている画面に映像が映し出された。

『ようこそ皆様。またお会いできて光栄です。』

そこに現れたのは文字。

簡素で味気ないフォントの単調な文字だった。

「クツクツク・・・やっとかよ。」

奈美がその文字を見て不敵に笑い、それが合図であるかのように画面が切り替わる。

『そして戸田幸市様、ようこそいらっしゃいました。御参加歓迎いたします。』

文字に歓迎されても幸市は全く嬉しくない。
それどころか、さらに幸市の中で不信感が増す。

「何ですか?これ・・・」

「クスクス・・・次に出てくる文字で多分分かるわ。」

「?」

真帆の答えになっていない答えに幸市は首を傾げる。

文字が切り替わった。

『それではルール説明を始めます。』

「はあ!？」

理解できず、幸市は素っ頓狂な声をあげてしまう。

「んなこたあ良いからさあ、始めようぜ!」

そんな幸市を尻目に、どこか楽しみを待つ子供の様に弾んだ声音で奈美が画面に対して急かすように言う。
しかし、文字は応えずに切り替わる。

文字が“ルール”を説明し始めた。

『これより皆様に行って頂くのは“爆弾ゲーム”です』

『円の中へ入り、キャッチボールの要領で爆弾を誰かに押しつけてください』

『10分の経過後、爆弾は爆発します』

『時間のカウントは人の手に握られている時のみ行われます』

『その爆弾は衝撃には強い設計となっておりますので、』

『取り溢しによる落下での爆発に注意する必要がありますありません』

『なお、以下にあげる三つの行為はルール違反となります』

『ご注意ください』

『円から出る』

『爆弾を6秒以上所持し続ける』

『画面に現れる指示に従わない』

『以上です』

次々と文字が切り替わり、そこまで表示されてルール説明は終了した。

「そんな馬鹿な・・・」

幸市だって『爆弾ゲーム』と呼ばれる遊戯は幼少時や小学校世代のレクリエーションなどで何度か行ったこともある。

罰ゲームを決めて行くと盛り上がるパーティーゲームだ。楽しかった覚えもある。

しかし、このルールではいわば罰ゲームとして“負けたら死ぬ”と殆ど明示しているようなものだ。

当然、単なる一般人である幸市に命を賭けるなどと云うような経験は無い。

『では皆様、円の中へお入りください』

無情にも、幸市に悩む時間など与えられず、画面には単調な文字が現れる。

幸市はひとまず逆らわず、他の3人と同様に近くにあった円の中へ入った。

位置関係は幸市から時計回りに真帆、奈美、晋輔の順。

「おい、受け取れ。」

気付けば、部屋の四隅にはいつの間にかダークスーツを着こなした強面の男性がそれぞれ立っていた。

その中の一人が幸市に拳大のサイズのゴムボールの様な物を投げ渡してきた。

「！！！」

幸市は慌てて、しかし割れ物を扱う様に丁寧に受け取った。

表面は予想通りゴム質であるが、中に何が入っているのかずしりと重い。

硬式野球のボールと同程度の重さだ。

『準備は整いましたね』

『では、ゲームスタートです』

瞬間、画面の文字が『10:00』という数字に変わり、次いで『09:59』、さらに『09:58』と表示され、やっとここで幸市はこの数字がカウントダウンだと気付く。

「（何だこれ！？冗談だろ？だとしても笑えねえ！）」

まだ余裕はあるとも云える反応だった。

この状況を冗談だと受け取れているのだから当然だ。

しかし、ルールにある6秒のデッドライン、画面の数字が『09:55』をカウントした瞬間、

ーガチャーー

と、幸市は背後で撃鉄を起こすような不吉な機械音を聞き、えも言われぬ寒気が幸市の背筋を駆け抜けた。

「うあ・・・ああ・・・ああ！！！」

その寒気に押されるように幸市は振りかぶり、正面の奈美に受かって思い切り投げつけた。

「おっと、危ないねえ。」

言葉とは裏腹に奈美は余裕の表情で受け取る。

野球で言えば幸市は野手であるが、超高校級と謳われるほどの幸市が全力で投げれば、その球の速度は軽く時速120キロには届く。

そんな凄まじい速力を持った爆弾^{ボール}を奈美は軽々と受け取ったのだ。

「クスクス・・・流石ね。」

「いやあ、危なかったよ。」

奈美は真帆とそんな緊張感の無いやり取りを交わし、たつぷり5秒待ってから晋輔に下手投げでフワッと投げ渡した。

晋輔はそれを丁寧に受け取って、しかし「ヒッ」という悲鳴を洩らし、すぐに真帆へ向かって投げる。

真帆はそれを一切表情を崩す事無く受け取った。

それら一連の流れをみても、どれだけこのゲームに慣れているかが一目瞭然だ。

「（七回目とか四回目とか・・・そんなもん参加回数に決ま

ってるじゃねえか・・・」

先ほどは恐怖と緊張で頭の中が真っ白になってしまった幸市だが、少しずつ再度落ち着きを取り戻して行き、冷静に状況を考える事ができるようになってきた。

「（とても冗談とは思えない。あの晋輔さんの怯えようは尋常じゃない・・・）」

当然、幸市に人の演技を見破る才能など無い。

しかし、異常な量の汗をかき、爆弾を受け取った瞬間に見せたあの怯えの表情はとても演技で作られるものには見えなかった。

「ほれ、行つたぞ少年。幸市君だったかな？」

「え!？」

思考に没頭していた幸市は奈美が投げた爆弾が目の前に来るまで気付かなかった。

「っ!」

しかし、常人ならば取り零したであろうそれを、幸市は持ち前のずば抜けた反射神経で見事に受け取った。

「おお、凄い凄い。」

「クス・・・素晴らしい反射神経ね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうして奈美と真帆に賞賛を受ける。

晋輔は相変わらず無言だが、その目は驚愕に見開かれていた。

「（あ・・・危ない・・・）」

内心かなり動揺しながら幸市は手元のゴム質のボール状の“何か”を見る。

これが、一人を簡単に殺すであろう爆弾だと考えると背筋に走る寒気が止まることは無いが、もう先程の様に取り乱したりはしなかった。

「・・・」

画面を見る。

表示されているのは『09:24』

「こんなもん・・・か・・・」

それは意図せずして幸市の口から洩れた声だった。

「へえ。」

「クスクス」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな幸市の呟きに三者三様の反応を見せる。
特に奈美は感心したような表情を作っていた。

「本当にそう思えるのかい？そりゃ大したもんだ。最後にも
う一回同じ事が言えたら褒めてあげるよ。」

「・・・え？」

奈美の言葉の意味を幸市が真に理解できたのはまさしくゲーム終盤のことだった。

The First Day - Close -

八分経過。

画面には『01:56』と表示されている。

キャッチボールなど日常茶飯事である幸市にとって、十分間と言う時間はむしろ短い部類に入る時間であるはずだが、ここまですべき様なほど長く感じた。

「フウ……」

思わず幸市は溜息を洩らした。

「お！疲れてきたかい？」

「クス……ここからが本番よ？」

途端、奈美と真帆から言葉を向けられる。

それは励ましているようでもあり、逆に貶しめているようでもあった。

「まだ……余裕ですよ。」

口上では強がって見せるが、実際は心臓はバクバクと高鳴って肋骨を内側から打ち付け、窒息して死んでしまうのではないかと思うほど幸市は緊張していた。

後二分足らずの時間で四人のうちの誰かの命が奪われるのかも知れない、という状況が幸市から少しずつ冷静さを奪っていく。

人が死ぬかも知れないというその現状に、漸く幸市は自分が死ぬのかも知れないという重圧と奈美の言葉の意味を理解した。

「へえ、そうかいそうかい。まあ強がれるのも強さの内さね。」

「クスクス・・・死ないように、ね？」

そんな幸市の内心を見透かしたかのように、二人は不敵な笑みを浮かべる。

その表情は自分が死ぬとは欠片も思っていない調子である。

「死にたくない・・・死にたく・・・ない・・・」

その点、晋輔はまるで世界の終りの様な表情で俯き、何事かをぼそぼそと呟いている。

しかし、そんな状態でありながら、投げられたボールは丁寧に受け取り、そして投げ返すという動作を行うことはできているのは偏に晋輔の生きたいという強い思いによるものか。

自らの命が賭けられた現状を鑑みれば、晋輔こそが常人の思考であって反応だろう。

しかし幸市は野球というゲームの上において、負けることを意識しては勝てない事を知っている。

この爆弾ゲームにおいても同様だろう、と幸市は例え空元気でも気持ちだけは折らないようにと心掛けている。

「（勝つか負けるかって修羅場は潜り抜けてきた俺だからできることでもあると思うけど・・・）」

当然、勝つか負けるかという程度の修羅場など生きるか死ぬかの

修羅場にすれば比べるまでも無い。

冷静に物を考えているつもりで、幸市は自分の思考能力が物凄く浅い所でしか働いていない事に気付いていない。

「（なんであんな平然としてられるんだよ・・・それどころが、なんかだんだん嬉しそうな表情になってる気がするし・・・）」

幸市が思うのは真帆と奈美の事。

平然としていられる神経など、精神力には自信のある幸市でも理解できなかった。

「おやあ？あんまりよろしくないかねえ。ま、良いや。さて、これで終わるかな？」

そんな風に幸市が思考に没頭している中、奈美は何事かを呟いて、そして爆弾を幸市に向かって投げた。

「え！？」

そんな奈美の言葉に幸市は不穏な気配を感じ、一旦思考を中断して慌てて画面を確認した。

表示されている数字は『00:02』、つまり残り二秒。

瞬間、幸市は世界の全てが凍り付いたように感じた。

「（・・・死・・・ぬ・・・のか？）」

目の前にはゆっくりと迫る、自らの吹き飛ばして命を奪うであろう爆弾。

圧倒的な死の恐怖が、命の危機に瀕した生存本能が、幸市の思考を飛躍的に加速させる。

「（落ち着け俺！二秒！それは俺を殺す時間じゃない！俺を生かす時間だ！！生き残る！生き残ってやる！！）」

思考時間一秒足らず、そして凍った世界は動きだす。自らを殺さないと分かった爆弾を幸市は恐れず掴み取った。

「（一秒だ！）」

画面の数字が『00:01』をカウントする。

心臓が飛び跳ねた。

「（グッ！動け！死にたくないだろ！！）」

思わず硬直しそうになる体を幸市は強引に動かし、なんとか掴んだ爆弾を投げ返す。

この時幸市は誰に向かって投げるかなど意識していない。ただ、持っていたくないという強い意志の下、単純につかんだ爆弾を手放しただけだ。

「へえ、私を殺そうってかい？」

爆弾は奈美に向かって投げられていた。

しかし、奈美の声に恐怖の色は無い、むしろそれが嬉しいかのような反応だった。

「クスクス」

真帆が意味深に笑う。

それは間違いなく嘲りの感情が含まれた晒いだ。
その対象は幸市なのか奈美なのか、それは分かりはしないが。

「百年早い！」

奈美がそう叫んだ瞬間、幸市は真帆の笑い声の意味を知る。

信じられない光景だった。

奈美はその場で飛び上がって体を捻り、サッカーで云うところのボレーシュートの要領でボールを蹴り返したのだ。

「そんな馬鹿な・・・」

確かにルールには『手で持っている間のみカウントをする』『衝撃では爆発しない』とある。

しかし、同じ事を幸市にできるかと言えば間違いなく答えは“否”。

サッカーボールだって技術の無い人間には空中で蹴るのは難しい。そのサッカーボールより遥かに小さい物を、命の賭けられた状況下で正確に蹴り返すなんて芸当ができる人間がこの世に果たして何人いるのか。

「ヒッ！ヒイイ・・・！！」

奈美の蹴った爆弾は弧を描いて晋輔の下へ飛ぶ。

晋輔は思わずと言った様子で後ずさるも、踵が円の縁に触れた瞬間のガチャリという金属音で足を止め、

「イヤだ！！助けて！！死にたくない！！！」

叫んで、せめて爆弾から距離を取ろうと手を突き出す。

その掌が迫りくる爆弾のゴム質の表面に触れた瞬間、凄まじい音と光が真つ白な部屋の中を満たした。

爆風で巻き上げられた砂塵が収まり、キーンと耳鳴りがして痛む耳を抑えながら幸市は眼を開けた。

「う……」

実はその瞬間まで、幸市はこの爆弾ゲームを何かの冗談だと、そう思っている節があったのだ。

ただの脅しで、実際にカウントが0になった瞬間に『ドッキリ大成功』のテロップが流れるとでも云うような、そんな仄々とした結末が待っていると、半ば本気でそう考えていたのだ。

最後に爆弾を受け取った時、体が硬直せずに動く事が出来たのも、その辺りに起因する。

幸市は純白の色合いの無い部屋の中にいたはずだった。

しかし、現在はある一点を中心に真紅で染められた不謹慎ながらも心奪われる鮮やかな色彩が描かれていた。

「う……あ……」

その“絵画”の中心。

そこにある晋輔だったもの。

上半身が吹き飛んだそれは少しの間ピクピクと震えていたが、やがて血の海に倒れて動かなくなった。

「う……ゲ……」

込み上げてくる吐き気を必死に抑えるが堪えられず、幸市は口の中に溜まる気持ち悪い吐瀉物を思い切り吐き出した。

「んゝ新人は吐くねえ。人死には慣れてないかい？クツクツク。そりゃそうだよなあ、私だって初めて目の前で人に爆発された日にゃあ三日くらい食えなかったもんさ。懐かしいねえ。」

「クスクス……人が目の前で死ぬなんてそうそうあることでもないでしょう？最初は誰だって辛いものよ。」

奈美も真帆も何かを懐かしむような、それであってどこか楽しげな声を出す。

幸市にはこんな無残な死に方を前にして、下手をしたら自分がそうなっていたかも知れないというのに、平気な顔をしていられる二人の神経が理解出来なかった。

「ゲホツ……こんなの……慣れるわけ……」

幸市は意図的に晋輔の方向から視線を逸らしながら二人に答える。

「最初だけだつて。次には平気さ。」

人道を大きく踏み外したかのような奈美の言葉だったが、幸市はその言葉の中でも特段に不吉な一つの単語に反応する。

「次だつて！？次があるんですか！？」

思わず幸市は悲痛な声で訊き返す。

「何を言っているんだか。私たちが最初に言った事をもう忘れたのかい？」

「え？」

一瞬、思考が止まる。

「私は七回目。」

「クス・・・私は四回目よ。」

死刑宣告、そう云っても差異は無い。

幸市はその絶望的な言葉にただただ呆然とするしかなかった。

「さて、そろそろかな？」

奈美のその眩きと同時に画面の『00:00』の表示が再び文字に切り替わる。

『皆様、お疲れさまでした』

『それでは、そちらの扉からどうぞ』

たったそれだけの文字で締められた。

「よっしゃあ！生き残ったあー！！」

「クスクス・・・良かったわね。」

その文字を見て、奈美は嬉しそうに拳を握り、真帆は微笑みながら、いつの間にか白い壁の一部に現れた扉の方へ歩いて行く。

「あ・・・」

幸市も、置いて行かれるという疎外感から、フラフラとした足取りで二人の背中を追いかけて、扉を潜って部屋から出て行った。

部屋の中に人はもう残っていない。

扉は自動的に閉まり、鍵が掛つたのか触れても開かない。

扉を潜るとすぐに外へ出た。

もともと、周囲を見渡しても景色に見覚えは無く、自分が地図上のどこにいるのかも判別できない。

目の前には学校にでもあるような長い机が置いてあり、その上に少し大きい黒色のアタッシュケースのようなものが五つ置いてある。

「それでは賞金をお渡しいたします。」

日は既に落ち、星の少ない空には満月が煌めいている。その月明かりに仄かに照らされた暗闇の向こう、長机の後ろから無

感情な声音で何者かの声が響いた。

「（賞金だって！？そうか賞金・・・だからあんなに嬉しうに・・・）」

声を発したのは男。

やはりダークスーツを着こなし、髪をオールバックにしてサングラスを掛けた無表情な男だった。

「戸田幸市様。」

「え？あ・・・はい・・・」

その男が幸市の名を呼び、幸市は何事かと思いつつも慌てて返事をして長机に駆け寄った。

「おめでとうございます。これは貴方の物です。」

そうしてケースを一つ渡される。

ズシリと重くそれは押し掛け、中身の気になった幸市はその場で開いてみた。

「う、うわ・・・」

そんな声が漏れてしまうくらい、中身はとんでもない物だ。

何か云う物でも無い、金が詰まっていた。

ただし、百万や二百万なんて単位ではなく、

「これって一億円・・・ってやつ？」

「ええ。」

男は応える。

話題だったドラマか何かで、幸市はケース一杯の札束を見たことがあった。

「あれだけ手に入ったらどうしたい？」なんて仮定の話を友達とした事もある。

その金額が、幸市の記憶では一億円だったはずだ。

「（こんな物を・・・ポンと渡すなんて・・・）」

透かしも入っている。

ひとまずは、確証はないが、本物。

「外島真帆様。」

今度は真帆が呼ばれ、真帆は嬉しそうにしながらも無言で受け取った。

中身を確認するなんて無粋な事とでも云うように、真帆はただそのケースを両手でぶら下げて持っていた。

「平井奈美様。」

「あいよ。」

そして最後に奈美が呼ばれる。

「奈美様は今回で生き残り記録を更新されましたので、規定に則りまして三億円を進呈いたします。」

そう言っつて男は残り三つのケースを全て奈美に手渡した。

「よっしゃ！」

と、そう叫んで奈美は拳を握りしめる。

体は鍛えてありそうな奈美だが、それでも30キログラムにもなる三億円は流石に重そうであった。

「・・・さて、次のゲームは二週間後になりますが、参加なさいますか？」

奈美が喜びに浸っている間、暫く黙っていた男が唐突に口を開いた。

幸市の心臓がドクンと脈打つ。

「・・・は？」

「次のゲームは二週間後になりますが、参加なさいますか？」

馬鹿にしているのか単に律儀なのか、男は同じ言葉を口にする。

「勿論参加さあ。」

「クスクス・・・私もよ。」

二人はそれが当然とばかりに躊躇い無く了承。

男と合わせた三人の視線が幸市に集まった。

「俺は・・・嫌だ！」

ギリツと歯咬みして幸市は叫ぶ。

「だってそうだろ！？こんな命のやり取り二度と御免だ！信じらんねえ！信じらんねえよ！！こんなゲームをまたやろうなんてイカレてるよ！！そんなの人間じゃねえ！！」

押し殺してきた感情が溢れ出し、幸市は堪える事が出来ずに全てを吐き出す。

思うままに言葉を叩きつけた。

「クツクツク・・・」

「クスクス・・・」

しかし、当然と言えば当然、堪えた様子も無く奈美も真帆も楽しげに笑う。

「何がそんなに面白いんだよ！！」

「いやあ、別にい。なあ？」

「クス・・・ええ、何でもないわよ。」

何でもないと言いながら二人はなおも晒う。

その雰囲気はまさしく嘲るようで、幸市がこの爆弾ゲームから抜けることは無いと確信しているようでもあった。

「参加なさらないのであれば、賞金は全額返却となります。」

そんな幸市と二人のやり取りに水を差すように男は一步前に出て言った。

幸市は思わずそちらを振り返る。

「そんな！」

「規則・・・ルールですの。」

幸市の反論は一瞬で叩き潰されたが、それによって幸市はかえって冷静になる事も出来た。

「（死ぬ思いまでしたのに全部が無駄？そんなのは・・・しかし、またあんな事をやる破目に・・・いや待てよ？俺が辞めてもどうせ他の誰かが連れて来られて同じことをやるだけだ・・・だったら、俺が参加し続ける限り、他の誰かがここで死ぬようなことは・・・ない・・・）」

自己犠牲という言葉が幸市の脳裏に浮かぶ。

間違いなくそれは尊い行為ではあるが、幸市のそれは違う。

幸市の心中に並べられた綺麗事など何の意味も無い。

今、幸市の心境を支配している物は一つだけ。

正義も悪も、善意も悪意も、偽善も偽悪も無い、純然たる欲だ。

「どうなさいますか？」

男は再度問うてくる。

答えなど確信しているだろうに。

「やるよ！やればいいんだろ！？」

「はい、了承いたしました。」

無表情だと思われた男の表情が不敵に歪む。

こうして、幸市にとって一度目の“爆弾ゲーム”は終了した。

The Second Day - Classroom -

気付けば、そこは見知れた自宅。

「・・・夢・・・だったのか？」

暑苦しい太陽が照りつける室内には平和な空気しか流れていない。まるで何事も無かったかのように、悪夢は過ぎ去ったかのように、いつも通りの景色だ。

「そんなわけ・・・ないのか・・・」

しかし、ただ一つの違い。

それは悪夢の中で渡された一つのケース。重量およそ10キログラムほどの場違いな黒いケースだ。

「ハア・・・」

思わず溜息を吐いた。

六畳一間で裸電球にトイレは共同、風呂なんて贅沢な物は無く、単に屋外にシャワーが備え付けられているだけの1Kアパート。駅もコンビニも近くには無く、室内には本当に最低限の家具しかない。

そんな戦前から建っているかのような檻褻い建物が幸市と幸市の母

が暮らす家だ。

家賃は現在の貨幣価値、及び賃貸の相場で考えればただ同然ではあるが、それだけで生活が楽になるわけではない。削れる部分は最低限全て削ってしまわなければ幸市達は明日の朝日すら拝めるか分からないのだ。

「幸市？学校で何か嫌な事でもあったの？」

ふと、母はそんな事を尋ねてきた。

「え？いや・・・何で？」

幸市は心臓が口から飛び出しそうになるのを堪えながら、なんとか平常を装って問い返す。

「元気、無さそうだったから・・・良くない事でもあったのかな？って思ってた。」

母は鋭い。

「いやあ何も無いよ。ちょっと眠いだけだって。」

と、幸市は取り繕った笑顔で答える。

「そう？それなら良いんだけど・・・」

母は若干安心したような表情で朝食（三日越しの固い米と水の様な味噌汁）を食べ始める。

「（そんなに俺って分かりやすいんだろっか？）」

そんな事を考え、幸市は母の目に止まらないように隠したケースのある場所にちらりと視線を向ける。

無論、本棚や筆筒、クローゼットなんていう洒落た物は無いので、今は使わない冬服の積んである場所に上手に隠してある。

「幸市？早く食べちゃいなさいね。」

「ああ、うん。」

考えに没頭していた幸市は即座に我に返って箸を動かす。

この母にだけは心配をかけたくない。

「おはようさ〜ん・・・っと、あつれ〜？幸市の旦那あ、元気ないですぜえ。あの日ですかい？」

「おう、おはよう。どの日の事なのか理解に苦しむが・・・それより、そんなに元気無いように見えるか？俺。」

いつも通りの通学路でいつも通りにやって来た正史がいつも通り幸市に声を掛ける。

が、正史は開口一番そんなことを宣た。

「（まさか第一声が『元気が無い』とは・・・そんなに意気消沈しているように見えるんだろっか？）」

そんな幸市の内心を知ってか知らずが、まるで元気づけるような
楽しげな表情で正史は言葉を紡いでいる。

「ああ、元気無いね。まるで、新作ゲームを買ったために意気
揚々と前日から店の前に並んでたのに二人目が開店の五分前に普通
にやって来たってくらい落ち込んだ顔してるぜ。」

ゲームなんてやった事の無い幸市には分かり辛い例えだった。

「ハッハッハ。そりゃ良い。よっぽど馬鹿丸出しな顔なんだ
ろうな、俺は。」

正史にも余計な心配を掛けさせたくは無い幸市は無理にでも明る
く振舞う。

それは傍から見ても明らかな空元気で、幸市自身もよく演技できて
いるなんて思っていない。

「おう、馬鹿っぽいぜ幸市。今すぐ馬と鹿に謝って来た方が
良い。」

「そりゃどういう意味かな？事と次第によっちゃあ血を見る
ぜ。」

「そして生き血を啜るのか・・・全く、どのドラキュラだ
？」

「飲み物ですら満足に飲めない俺の家は血液すら貴重な水分・
・・・って、んなわけねえだろ！何言わすんじゃい！！」

「勝手に言ったくせに」

しかし、正史は幸市の意図を汲んでか、深く詮索してきたりはし
ない。

幸市が明るく振舞いたいなら、それは幸市が日常を楽しみたいと云

うことで、正史は幸市が何を悩んでいるかも知らず、ただ、楽しい日常の空間をそこに作り出す。

「（全く・・・分かってんだか分かって無いんだか・・・ま、そこがこいつが俺の親友たる所以なんだろうさ。）」

と、くだらないやり取りを交わしながら、ふと幸市はそんな事を思った。

「はよゝつす。」

「おはようさぁんとな。」

と、いつも通りの挨拶を口にしながら幸市と正史は教室に入る。そこに返ってくる返答もいつも通り気の無い返事ばかりだ。

やはり、というべきだろうか、教室の中はいつも通りの騒々しさだった。

いつも通りの話題、いつも通りの噂、そしていつも通りの事実。

そう、幸市は知っている。

語られている噂話の、真相全てとまではいかずとも、その一端くらいは知っている。

“神隠し”で消えた人間のその行く末を知っている。

「これで何人目なの？」

「分かんない。数え切れなくらいってのが正解かな。」

そんな会話が聞こえた。

幸市だけが知っている、また増えた失踪者、佐藤晋輔のこと。

哀れとは思わない、いや、考えない。

広い意味では直接的に、狭い意味では間接的に、幸市は彼の死に携わっている。

哀れだなんて、生き残るために奈美を殺そうと考えた幸市に思う資格は無い。

しかし幸市はそれでも考える。

「（俺が死んでいたら・・・）」

その死はここで噂される程度の物で終わるのだろうか。

悲しまれず、惜しまれず、涙されず、ただこの場で、神隠しにあった一人として何かしらの憶測の対象になるだけなのだろうか。

そんなことはない、と幸市は考える。

きっと彼らは悲しんでくれるし、クラスメイトとの永久の別離に泣いてくれる者も、その別れを惜しんでくれる者もいるだろう。

真実を知れば、幸市を助けるために奮闘しようとしてくれる者だっているかも知れない。

もし幸市が他のクラスメイト、例えば正史がそんな状況に陥った事を知れば、身を顧みず助けようとするくらいの気概はある。

奇しくも、昔正史が自分にそうしてくれた様に。

「幸市？マジで顔色悪いぜ？保健室行くか？」

黙ってしまった幸市を気遣うように正史が声を掛けてくる。
幸市はそれに何でも無いと答えて自分の席に座る。

丁度その時間にチャイムが鳴り響き、担任教師が教室に入ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037m/>

爆弾ゲーム

2011年3月27日11時49分発行